

ネムリスト

目覚めと眠り。目覚めは淡い青の色で、微睡む赤とは異なる。眠りは白い月と星の光で青く染まる。黄昏の赤とも異なる。

最近睡眠から目を覚ますと、涙がとめどなく流れている。

目覚めをベッドに置き去りにして立ち上がる。16時間が経っていた。最近睡眠時間が増加している。よくない兆候だ。

背を丸めた姿はまるで二本足の猫だ。長い足と腕はゆっくりと動く。身体のアインを見せる受信スーツの上から白い布を羽織っている。ワンピースというよりも寝巻姿の老魔法使いだ。しかしその背筋から尻にかけての丸みは女だった。肩でざっくりと切り分けられた髪から覗くその目も、鼻も口も。

トーストを焼き、冷蔵庫から取り出したハムとレタスを指で割いて大量に挟み込む。食べなくては。食べなくては。電気を栄養分として生き物を生かす方法が確立された現代であっても、食事という行為は優先度の高い娯楽として人氣がある。排泄という尾籠な行為が回るが、個人の居住スペースで行われるというのならさして不快感はなかった。

肉に染み込んだ塩味と小麦の練り物を焼いた香ばしいさくさくフワフワしたものをレタスのみずみずしさで押し込んでいく。電気ケトルが大きな湯気を吐き出して停止したので茶葉を白いポットに適当にふちまけた。その間もずっとホットサンドイッチは口の中に押し込まれ続けている。これ以上睡眠をとるわけにはいかない。目覚めていないのは死んでいるのと同じだからだ。

ようやく自分が、自分でいる実感が出てくる。登録された名前を思い出す。人生を曖昧に。孤独の苦痛を忘却に。Dカサ・*DeKasa* 白尾美は代用紅茶を嚙りながらヴィジョンをつける。オートミックスに設定されたニュースが重要度の高いものと少ないもののかき混ぜて伝え始めた。

「睡眠代用機の普及は進んでおりません」

当たり前だと、とDカサは歯ブラシを加えて思う。ミント味だ。真面目ぶった男と女が口元に笑顔を浮かべてわかりきっていることを、さも大発見であるかのように語るのが面白い。

「人間にとって眠りは人間の眠りだから価値があるわけだね。それが容易に機械では代行できないんですよ」

「眼球運動の疲労については解決したわけで、それは人体の学びから達成されているわけじゃないですか」

「しかし機械ではダメなのです」

キッパリとコメントターの一人は断言した

「実際、睡眠代行は実心地よいでしょう」

「まっふあふわ」

コメントターの一人の意見に賛同して、カサは薄く笑う。髪の毛を短く刈り込んだ彼女は、全くだ、と言ったのだ。

フワフワの泡を注ぎ込んだ水と混ぜ合わせて口腔から吐き出す。味がなくなるまで繰り返して口を拭いた。側の鏡を見ると目やにのついた切れ上がった目尻の女が映っていた。

「あー、瞼が重いわけだ」

瞼の奥から擦るように押し出すと、黄色く干からびたカサがボロボロとこぼれ出た。瞼の裏がじわっと鈍い。多分私はまだ眠っているのだと思う。目覚めは夢を見続けているのだ。

青空の下で人は眠らずに働き続ける。いや、動き続ける。肉体の疲労を人類は克服した。眠りによる癒しにより身体を回復させる必要は無くなった。ただ記憶の蓄積たる脳のカサの処理作業と、凡庸な広告が残った。

睡眠代行はあなたの脳を綺麗にする。

ピンポンとベルが鳴る。珍しい。Dカサはまどろみから覚めて立ち上がる。誰であれ、ありがたかった。覚醒時間が短くなっている。眠りのない世界の中で、こんなにも眠い。誰かと話すと少しはマシだ。

ドアを開けると、女がいた。年齢は自分と同じくらいだとDカサは思った。訪れた女はピンと背筋を伸ばしている。髪は結びもせず腰の辺りに垂れている。時代遅れのTシャツは胸の盛り上がりや遠慮なく晒し、ジーンズは重量感のある腰をしっかりと支えていた。Dカサの顔を見た途端リラックスしたのがわかった。

彼女を見るといかに自分から生命力が抜けているかをDカサはわからされた。なにか食べなくては。目を開けているだけでカロリーはみるみる消費される。

「ハイ」

軽く手を挙げる彼女を、Dカサはどこかで見た記憶がある。目覚めの中に置いてきたのかもしれないとDカサは思う。目覚め、彼女はDカサにいくつか隠し事をしている。

「どちら様？」

と尋ねると「カサ、私はあなたを知っている」と彼女は笑った。

「それで充分では？」

「どういう意味？」

「会いたかったよ睡眠代行。いや、ネムリスト」

なるほど。

確かに彼女はDカサのことを知っているようだった。

静かに開けたドアはそのまま外と地続きになった玄關だ。来客はDカサの部屋に入ってくる。その足はまるで部屋

の中みたいな素足だった。床が汚れる。いや、Dカサが嫌がったのはそこではない。Dカサもわかっている。部屋に入ってきた女は？ 彼女もきつとわかってるに違いない。そんな笑み。

「お酒ないの」

ソファに腰をかけた客にDカサは「飲まないの」と答えた。

「飲むと眠くなる」

「相当ダメみたいね、カサ」

本当にこの客はDカサのことを知っているようだ。とりわけネムリストのことを。だが、Dカサのことは知らないのだ。Dカサはカサであってカサではない。Dはダミーの意味だ。Dカサはカサのダミーなのだ。女はカバンから土産を出す。これ、と手渡されたのは豆の菓子だ。糖衣を纏った茶色い豆を皿にあける。好みの味だ。

「なにがダメなの？」

試すつもりでDカサは尋ねる。女は足を組んで客は豆を一粒こりこりと嘯む。挑むような目遣いが、微笑にかわる。Dカサが用意したコーヒーのカップを手にとって言った。

「眠りは社会からの死、これはわかるね」

「眠っている人間は、社会に関われない」Dカサは答える。女は笑う。

「そう。」

だから、人間は起き続けることを選択した」

かつて人類は、眠らないことで成功を手に入れようとしていた。眠らずに努力をすることこそ必要で、ねむらないことは個人の楽しみを最大化すると考えていた。

「笑っちゃうね。問題はそんなことじゃないのに。眠っているということは死んでいるということ。眠っている間に人は社会から、集団からおいていかれる。そんな単純なことすらわかっていなかった。」

だから皆、眠れと言う。

自分の身体にしか意識は宿らないのだからと」

そんなものではない、とようやく人が気づいたのは、コンピュータネットワークの広がりからだ。光の速さで今を共有する技術が出来て、ようやくたどり着いた境地だった。

単純に通信方法、ということではない。

ただ遠くから意志を届ける方法なら様々な方法があった。手紙がそうだ。本がそうだ。物理的な形をもつものはさまざまな手法をつかい、相手のもとに発生者の声を届けた。やがて声という物理までが線を通し、電波の波にのり、相手に届くようになった。ではそれが何かを変えたのか？ それは次の進化へのはしごにすぎなかった。住所がなければ番号をしなければ通じることのできない意識の共有は、所詮許可制の不自由な面会時間でしかない。しかしコンピュータネットワークという光の神の奴隷は、その箱から伸びた管で人と人の生活を繋げた。昼の生活を送る人が同時刻に夜を過ごす人と同じ時を過ごして同じドラマを見て、感想を言い合うことのできる世界。それは通信ではなくて共有だった。今をやりとりするのではなく共有する体験。それはやがて、同じ時を共有する人を増やすことへの悦びに変わっていく。ゲームの世界を共に体感するために死ぬまで起き続ける人が現れた。休みなく仕事をすることができるようになり狂ったものがいた。この共有世界の果てに肉体があることを確かめるために会い、その肉体に溺れていく者もいた。全てが今を共感するための行為だった。

そうしてはじめて人は「誰一人欠けてはならない」と理解する。

寝てはならない。

寝るのは、死だからだ。

女は豆を噛む。

「もう人は眠らない。でも夢は見る」

Dカサもつまむ。食べなければ。食べなければ眠ってしまう。

「夢は蓄積され、脳を圧迫していく。だから夢を輩出する必要があった」

ぐっと女はDカサに顔をよせてきた。びっくりにして豆をとりこぼす。女は尋ねた。いま改めて気づいたが、彼女はとても愛嬌のある顔立ちをしてる。なのに口元だけ微笑して、食い入るようにDカサを見ている。必死な表情だと思う。それがなんだかDカサにとってはとてもうれしかった。

「ここまでひどいとは思わなかった。乗務員はどうしたの」

女の手がDカサの顔を掴む。荒々しく優しい。うっとりして身をあずけると、軽くはたかれた。痛い。

「適切にダミーに交代しなさいよ。死ぬわよ」

「死なない」

Dカサは今日初めて、本当にうれしそうな顔をした。

「だって私はダミーの本体だから。」

カサはずっと寝ている」

ネムリストは感応能力者だ。

人類は究極の共有、機器すらほぼ最小限にした意識の共有を行おうとした。だがそれが実用化されるのは今でないことを科学者たちは認めるしかなかった。

ただ、その繰り返しされる失敗が結局眠らずに済む人類を作り上げたことは賞賛に値する。

今まで以上に今を同時体感するためには、要するに資格が必要なのだ、と科学者たちは考えた。感応能力、他人と心を繋げることでできる能力を持つものでなければならぬ。この意識を共有できる者たちのメカニズムを解き明かすことで、人は映像出力機も音声機器も接触型体感機がなくても誰かと体感を共有できるようになるのだと。電気線

による脳接続が基本的な実験となった。これは被験者にとっても感応能力者にとっても身体に負担のないものであったことは特筆すべきだろう。その結果、二人が社会に関われない者になることに、人はもう耐えられなくなっていた。

幾多数多の実験の結果、感応能力者は、誰かの意識を受信することしか出来ないことが明らかになった。同時にネガティブな思考をもつ誰かが感応能力者と繋がったとき、感応能力者がそれを癒やすことができることも明らかになった。子供の頃のトラウマから、先日あった厭なことまで。鬱病をはじめとした精神疾患にまで効果があるということがわかってくると、人々の期待は最大限にまで高まった。ただ、そのネガティブな感情が完全治癒とまらないのは、被験者が皆起きていたせいだった。では眠りはどうか？ これは治療力を限りなく（ ∞ ）%に近づけた。夢も見なかった被験者の睡眠時間が減っていったのも注目された。感応能力者も眠りについていけると、その効果はさらに高まった。眠らずに済む日が訪れるのに、それほど時間はかからなかった。

「ネムリストは睡眠をとることで、接続した人たちの夢を処理する」

Dカサは女に絡みつきながら言った。

「眠らない人々はいつも夢を垂れ流し続ける。それをいつも掃除しつつづけなければ、人は再び眠りに落ちてしまう。脳が夢で窒息してしまうから」

「処理し続ける肉体を世話するための、感応者の精神を受け容れるのがダミーでしょう」

女は拒まない。Dカサの求めるままに口づけをする。ひんやりとしている。このDカサの体温は低い。

「そう。はじめは交代をしていたのよ私も」

Dカサは言う。

「私の身体をカサがつかって、私はその間、カサの仕事をする。眠りのなかで眠らない仕事をする。いつの日か、私とカサは目覚めのときを過ごすようになった。同じ顔で同じ考えて、同じ性格のはずなのに、変だと思わない？」

そのとき私は2人いるのよ」

「にぎやかでいいじゃない」

「ひとことだからたのしいの？ あなた」

女はくすぐったそうに言った。

「そんな呼び方しないで。久しぶりに名前と呼んで」

「あなたの名前なんて知るわけないでしょ」

「じゃあ、Dでいいわ。あなたと同じ、D」

女があたりまえみたいにいるので、Dカサは顔をしかめる。

「あんたもダミーか」

するりと口から出てきた。時計はまだ11時を刻む前だった。

楽しそうに、Dは笑った。

女は、もしかしたらネムリストかもしれない、と薄々気づいてはいた。しかし、ネムリストの意識を運ぶ機械人形であるとは思ってもみなかった。普通ダミーは本体から離れない。

乗務員は本体から二〇〇目以上離れて生活ができない。遠くに行く場合は本体が行けばいいだけのことだ。そして彼女は、本体の意思を持っているわけではなさそうだ。

彼女はDカサに言う。

「本体を見せて」

「何故」

「私も探しているものがそこにあるから」

「あなたの探し物はなんなの」

「私の半身よDカサ。あなただって気づいているでしょう」
Dカサは頷くしかなかった。

寝室に行く。そこには目覚めがいた。目覚めない目覚めが目を閉じて夢の中にいる。
カサだ。

ネムリスト・カサ。

「本体は一日に何時間起きているの」

「24時間」

「なんて？」

女が訊き返すのがおかしくてDカサは笑った。

「24時間ずっと寝ているの。私はその分、彼女の眠りを眠っている」

「あなたが彼女の目覚めの代行者なのね」

カサは、Dカサよりもやせて、髪は長かった。電気ケープルが鼻の穴に通る、口を使わぬ食事をおこなっている。
空気中の水分を取り込み、喉は渇かない。内臓は適温のまま維持されている。再びつかうこともなく、ただ眠り続ける。

「行くよ」

寝台に乗って、女が言う。

「私たちもアリスする必要がある」

「兎穴は一人用だよ」

「Dカサ、このままだと死ぬただだよ」

「アメ！」

Dカサは叫んだ。恐怖からでた声だった。女は驚いた顔をする。緊張は、指を収縮させる。Dカサは拳を固める。「ダメだよアメ。夢は一人で見るものだ。2人乗りは多すぎる。3人乗りはもっての他だよ」

女は自分の唇を撫でる。悩むとアメは、唇を人差し指で撫でるのだ。懐かしい気持ちに、Dカサは戸惑う。これは存在しない記憶。もう一人のダミーは、首を横に振った。

「まざりはじめている。あなた、私の名前を呼んだよ」

「え？」

「本体が秘密にしておきなかった秘密が、夢からダダ漏れになっている。溺れ死んでしまう。それと、言ったでしょ。私はDよ」

Dは横たわるカサの手を握る。もう片方の手は、Dカサを手招きする。Dカサは恐れている。こんなことは初めてだ。誰かの手を介して、本体に触れるなんてことは。

「行くよ」

もう一度、Dが言った。

意識は強くひかれて、夢のなかにはいる。

黒い。

かつて色にまみれていた夢は、色がまざりすぎて真っ黒だ。かわきかけた墨汁のような泥がねっとりとし、満ちており、ときおり蠢いている。微かな意識の光が、キラキラする反射を生み出した。

DはDカサの手を引いていく。自信にみちた歩みは、一瞬泥濘に光の跡を残した。やがて乾いた砂が現れる。黒い結液は砂で現れて、DカサとDはサクサクと白い道筋を歩む。これが正気だという。淀んだ夢のなかを歩める、唯一

の正気。

「迷いがないね」とDカサがいうと、Dは、以前も見たことがあるからね、と言った。

「やがて、白い砂が失われたのも、見た」

やがてどこからか音が聞こえはじめた。荒い息づかいと、肉体が擦れる音だ。カサだ。

「へえ」

Dは感嘆の声をあげた。

「彼女は勇敢だね」

カサは剣を持っている。

剣を振るい、夢を断ち切っている。断ち切られた夢は息絶えて消える。ドロドロの地だけを残して。休みなく剣を振るうカサのもとにDカサは駆けていく。

「あたりまえでしょう。カサはいつだって勇敢だよ。知らなかった？」

尋ねるだけ無意味だと、Dカサは知っていた。Dもよく知っているはずだ。わかっているはずだ。Dカサにも、もうDが誰かはつきりわかっていた。

アメ・Kkhu^本 || 黒野江。

カサがまだ、ネムリストになる前の友人だ。

カサは、アメのことが本当に好きだった。

「アメも選ばれたの」

とカサは聞いていた。言葉はいらなかった。カサもアメも感応能力者だからだ。カサが手で触れると、どんよりとした気持ちに移ってきた無味無臭の餅のような感情だ。できるかぎりカサのなかに苦いものを残さないように気をつ

かったアメの感応能力だ。

「気をつかうなよ」

学校の机につっふすアメの耳元に囁くと、とろりと苦い想いが伝ってきた。蛇のような想いがカサに流れ込む。

感応能力者はネムリストになることが定められている。人々の夢の消化役として今や必要不可欠となってきた眠りの代理人は否応ない選別によって弾き出される。

「そうだよ。私たちは生贄なんだ」

カサはアメに話しかける。アメは、つっふしたまま泣き出した。

「二人でならよかったのに」

夢でも宇宙でもどこまでも一緒に行くのに。子供らしい逃避妄想だとカサは言わなかった。そんな賢い言葉を知らなかったわけではない。本当はカサも同じ気持ちだったからだ。

ああ、泣かないで、アメ。

私たちは、人の夢を殺す為に生まれてきたんだよ。きつと。

「あたしか！」

汚泥の中でカサが叫んだ。

Dカサの手にも、剣が握られていた。カサに駆け寄りながら剣を振るうと、とろりとした夢の残骸は人型から退化していく。怪鳥から龍に変わり、黒い魚が泳ぐ。

カサは低い声で言う。

「なんでこんなところに」

カサの剣は原生生物にまで退化した、数多の触手ある平たい夢を刺し殺しながら言った。

「あたしの眠りのサポートをしないとダメでしょう」

「いつまでもあんたが起きてこないから、客が来たのよ」

「誰」

「あたしたちのことを、よく知ってる人よ」

戦う手を止めて、カサは眩しそうに目を細めた。Dカサはカサと夢の間に割り込んで剣を振るう。

「……ダメ？」

輝くDの、顔が見えない。ただ白い夢の砂山の上に立ち、このところの夢の荒地を見ている。

「壮観だね」

Dが言った。

「眠りの海が夢を蓄えている」

「だからいったい誰！ 誰を連れてきたの、あたし！」

カサが走り出した。剣をもったまま。今までカサに襲いかかっていた黒い夢がすばやく足元を這っていく。てっきりカサを襲うのだと思ったら、カサを追い抜いて、砂山のDに向かった。

「ダメだよ」

Dが手を挙げた。

「それじゃあ、お前は逃げられない。私」

まばゆく輝くDの手の平に、這い寄る闇は霧散した。気がつけば闇がよろよろと這いより、Dに飛びかかろうとしていた。Dの笑顔だけ見えた。蛇を焼きながら、Dは白い砂浜を歩いて行く。ジーンズに包まれたおしりが揺れる。この鬱屈した闇のなかでDは自由だった。おそれるように泥が逃げ出す。湿った砂は、雨上がりの庭だ。

「ダメだ、私」

Dは言った。

「お前はもう死んだんだよ」

夢が裂けた。

その夢の黒い海の底を見て、Dカサは叫んでいた。

淀んだ夢の海の底に横たわっていたのは、真っ白くあまりに巨大なアメだった。

「アメ！」

Dカサの後ろで、悲痛な声が聞こえた。

カサが駆けていた。

「だめだ、だめだ、消えてしまう！ アメが消えてしまう！！」

「本体は死んだんだ、カサ！」

Dは叫んだ。

「私が、夢に交じって逃げ出したせいで、本体は死んだ。私は死ねないまま残された。私は死にに來ただけだ、カサ！」

カサまで死ぬ事ないんだ！！」

カサは走るのをやめない。Dは舌打ちして駆けだした。Dカサは、手を伸ばした。Dは手を振り払おうとする。D

カサは離さない。

「一緒に、死なせてあげて」

「やだ」

「アメが、泣いている」

Dの顔が青ざめる。見れば、吸り泣くアメの裸体に、カサが抱きつくのが見える。

「もう大丈夫だよ」

とカサは言った。

「消えるときは一緒だ。一緒だったら、怖くないだらう」

「私は、あなたを消したくなかっただけなの」

アメは言った。

「だって、すり潰されかけたあなたを、夢の奥で見かけたから」

Dは呆然と立ち尽くした。

Dカサはその手を取った。

「もう死にたかったんだ」

そう囁いた。

「大勢の人の覚醒のために、夢を処理し続けるのが、くたびれて。

重なる目覚めのなか、私たちははしやきながら食事をして、夢のなかでお互いを剣で刺しあった。でも死ねなかった。

だからカサは決めたんだ。

あたしはもう、眠り続けるって。だから眠っている間に、目覚めの世界の自分を殺してくれって。

私はカサを殺すことはできなかった。だから、目覚めの代行機になろうと思ったんだ。私が食べ、目覚めることで、カサに生きる力を取り戻させようって思った。

2人で一緒に死にたかったのに」

「私にはわからない」

Dは呟いた。

「望んだ終わりじゃない。ただ、ようやく眠れる」

夢は身じろぎする。黒いどろどろの世界が逆流していく。足元は乾いていき、ただ清浄な白い砂だけになる。2人のDは手を繋いだまま倒れた。空は真っ黒で星一つなく、やがて白けてなにもかも消えていった。

夢を押しつけていた人々が瞬間的な眠りに落ちたのは、ほんの数分のことだった。

目覚め続けた繁栄は数分の、逆流した夢によって大きく混乱した。

やがてすでに限界に達していたネムリストたちはその夢に呼応して、次々とためこんだ夢を吐き出していき、人は飢えるほどに眠り。

夢は人を離すことはやなかった。